

日本大学三島高等学校 同窓会会報

第 11 号

昭和57年3月1日
静岡県三島市文教町2
日大三島高校同窓会 発行

き
ず
な

会 長 高 田 菊 平



会員の皆様にはお変わりなく御活躍のことと思います。同窓会の活動に常日頃から御協力をしていただき、おかげ様にて発展を続けておりますこと大変ありがたく思っております。この一年間をふりかえってみまして、感じますことを少し話してみたいと思います。

第一期生は今年で四十歳になり、年齢的にも社会的にも、それぞれ職業に、リーダーとして又幹部として、その力量を発揮する年齢となってきました。そしてそれ

に続く二期、三期、四期、五期……と、同窓生の活躍がだんだん大きくなりつつあると感じております。

そんな中で、昨年の九月十三日には、二期生で同窓会幹事長の遠藤日出夫君が、長泉町町議選に初出馬でみごと当選されましたが、その当選に至るまでの同窓会員有志の活躍をまのあたりにみて、つくづく同窓会という「キズナ」が強くなってきたいなあと感じた次第です。

これは一つの事にすぎないかもしれませんが、同窓生のそれぞれの社会への奉仕に対して、お互いに協力できるところは存分に協力しあってお互いに発展していこうという仲間意識の働きにはかならないと思います。

前会長の故玉津先生が常に言われておりました「仲間集団としての活動」として「小さな仲間集団

からの出発」という考え方は世帯が大きくなった我々同窓会の活動を発展させていく為の指針ではないかと思えます。

御承知の通り各地域に分けた支部の活動もこれであり、さらに三島支部のように、三島分会、長泉分会、清水分会と三つの分会にわけて、近くの仲間からの集団をまとめていくというようにそのすそを広げていくのもよい一例ではないでしょうか。又、田方支部においても同じように分会で活動を展開して成功しているのではありません。他の支部におかれましても、これらの例を参考にしながら多くの仲間集団をつくることも推進されたらと思います。

既に御承知の通り今年三月三十一日をもって、二十一年間続いた母校の工業科がその歴史を閉じることになりました。この二十一年間に約五千名の卒業生を社会におくりだしておりますが、この工業科廃止に關しましては同窓会として特に工業科の同窓生が中心となって「工業科存続」の願いをこめて署名運動を展開して、学校当局との交渉をもつという経過をへて現在に至っておりますが、この活動

の中で特に感じましたのは、やはり母校との「キズナ」というものは同窓生にとってどれだけ大切な、重要な意義をもつものであるかということであります。

工業科廃止にともない八項目の学校当局との申し合せ事項がありますが、既に記念碑についても主として工業科同窓生の有志のキャンパスを加えて学校当局と共に建立することができましたし、又記念誌についても近々出版のはこびとなつておると聞いております。

それらが工業科同窓生の母校に對するよりどころとなることを切にねがっております。最後に会員の皆様方の一層の御協力と、又御健康を祈念いたしましてご挨拶いたします。

(五十七年一月二十四日)

会 長

高田菊平氏の紹介

氏は、昭和五十三年四月より、第三代目の会長としてその任をつとめています。氏は、本校の第一期卒業生であり、現在は、ニュー・デルタ工業株式会社専務取締役として、大変に忙しい日々を送っています。

氏の、誠実で温和な人柄は、同窓会員の誰しもが慕うところであり、同窓会員の心のよりどころとして、まさしく会の中心そのものにあるのです。

(住所)

三島市西若町九の二三
電・七五・〇三七六



工業科記念碑

御挨拶

校長 北岡 功



もうこの三月に第二十二期生を世に送る五十七年となりました。同窓会設立以来皆さまに最も御縁の深かった玉津徳太郎先生の一周年忌（二月十四日）もほどなく訪れる季節となりました。

こと、教育にのみしぼって申しあげますと、この四月から全国の高校教育は新学習指導要領に沿って再発足することになりました。教育課程に巾ひろいゆとりをもたせ、個性の伸長を図るのが目的には違いありませんが、国公立にみられるような受験体制の画一化がある限り、今後問題が残ります。その点、本校の教育の軸がずっと厳しい躰けを通しての人間教育におかれていたことを改めて自負したいものであります。めまぐるしく変転する教育技術ないし

は科学技術のなかで、最後に残るものはやはり人間自身の謙虚と創造に向かう意欲そのものだと思うからであります。かつての付属高校間の、学力におけるベナントは在京の付属に譲ったとはいえ、総合的教育を謳う新学習指導の視点からいえば、決して今後悲観すべきものではないと自問しつつ、新しい出でたちの準備にとりかかっている所でもあります。それは生徒一人ひとりがもっている社会貢献度の適性の抽出を徹底的に体制の中で図ることだと思えます。その実現には、在校生それぞれの父兄の呼応と、いまひとつは、今後同窓会の皆さまの伯楽にも似た適性生徒の摘出に温い御支援を各地域ごとに乞わなければ成就するものではないと存じます。勝手ながら宜しくお願い申しあげる次第であります。

四科分立のもと、ともに歩ゆんでまいりました工業科課程も、御案内の通り、五十五年度にその募集を停止し、普通科課程にその定員を移入しましてからちょうど二

ヶ年、この三月をもって二十一年にわたる独自の歩みを止どめることになりました。これにまつわる懐旧と哀惜の記録は、三月までには完成予定の「記念誌」、「エンジニア」誌を通し、とくと御閱讀頂きたく存じます。また、二月の去日を期して、希望の像のかたえに建立する「記念碑」の除幕式をも用意している所でもあります。昨年六月の桜陵祭には工業科二十一年の記念特集として特設展示会場をしつらえ、在校生はもとより近在の人々にも披露いたしました。ここに更めて関係の皆さまに心からの敬意と謝意を表すものであります。

団結は怖いものです。たとえ鈍刀でもそれを助ける砥石があればどんな骨でも切れるものであります。同窓会の砥石を土台に、お一人ひとりの生きがいと幸せをぜひ自分のものにして下さい。一人でも多くの力を寄せられて益々内実ゆたかな同窓会に成長されますようお祈り申し上げます。

(五七・一・十)



幹事長挨拶

同窓会を我がものにする

幹事長

遠藤 日出夫



互の信頼が保て、意味のあるものとなっております。そして、総会は日頃のそうした活動報告とともに心の結束、ということになります。

そのいずれにしても、自分からその会を利用する気持を持つことが重要です。そうした中に同窓会の意義が生まれて来るわけです。どうぞ、第二十二期生の皆さん、より良い人生を、同窓会を我がものとしながら頑張ってください。

遠藤日出夫氏の紹介

五十三年の四月より幹事長をつとめています。氏は、本校の第二十二期生であり、高校時代はバスケット部員として大いに活躍しました。現在もそのバイタリティをもってこの大役を力強くつとめています。

現在は、長泉町で割烹「静山荘」を経営するとともに、「日刊静岡」の支局長をつとめています。また、昨年には、長泉町町会議員に見事当選し、名実ともに若手のホープなのであります。

(住所)

駿東郡長泉町中土狩七〇七の二 電・八六・六三二四

歓迎のことば

人生の友

副会長

植田 正年



第二十二期生の皆さん、卒業おめでとうございます。さぞかし、これからの人生に大きな期待を持って喜ばしい気持ちでありますう。

さて皆さんは、これからは恩師の手をはなれて自らが選ぶ手段と方法で、真の意味での人生を歩むことになるわけです。自分の人生には自分で責任を持つことになるわけですが、言葉で言うほどに容易いものではありません。時には難関をのり越えるべく苦しみを味わうことがあるでしょう。その時話相手になり慰めてくれるのは友人でありましょう。人生に友人はどうしても必要なものであり、人生を彩る最も重要な存在となるのではないかと思います。

その友人というのは、自分ととりまぐずかな存在でしかないかもしれませんが、そのわずかな存在がいくつも集まって、同窓会はでき上っています。そこに同窓会の存在する意義があります。

今後、人生が果てるまで我々は日大三島高校を卒業した人間同士です。共通の心を持って共に助け合う人生を送ろうではありませんか。

皆さんのご活躍を心から祈ってやみません。

副会長

植田正年氏の紹介

氏は、本校の第一期卒業生であり、天城湯ヶ島にある、嵯峨沢館館主として、仕事の上でも広く人望を集め活躍しています。

(住所)

田方郡天城湯ヶ島町門野原

四〇〇の一

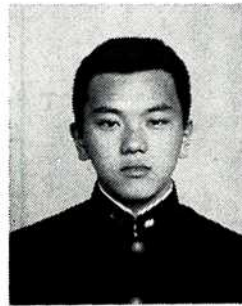
電・五・〇一一五

新入会員挨拶

“新たな人間関係”

第二十二期生

露木 忠 男



この度、私たち五十六年度卒業生は第二十二期生として、同窓会に入会させていただくことになりました。母校では、第二十期生や第二十一期生の先輩方との交流は学校生活を中心に行いましたが、

それ以前の先輩方との交流は、非常に少なかったように思われます。しかし、私たちがこれから社会の一員として活躍のとき、年齢の差に関係なく、先輩方との親密な交流をすることができると思います。同窓会員もすでに二万名を越えていることを知り、各方面で活躍されている先輩方から数多くのことを教わることになるでしょう。

先輩のみなさまもご存知のとおり、母校の工業科は長い歴史に終

止符をうち、廃止ということになってしまいました。私は工業科の最後の会長として、工業科の最後を飾るために、精一杯の努力をしてきました。工業科の先輩方が築きあげてきた伝統を十分に後輩へ伝えることはできませんでしたが、今後は普通科や女子の後輩諸君が、工業科の良き伝統を受け継いでいってくれるものと確信しております。

工業科が廃止となっても、われわれは第二十二期生として同窓会に仲間入りをした以上、母校や先輩のために、同窓会に対し積極的に参加し、同窓会員としての自覚を高め頑張るべく所存であります。

一步、社会に出れば、まだまだ未熟な私たちですが、先輩方にアドバイスしていただき少しでも早く一人前になれるように頑張ります。どうか御指導のほどよろしくお願い申し上げます。

第二十二期生クラス幹事

三の一	八木 悟
三の二	木村 寿哉
三の三	斎藤 勝利
三の四	石川 和俊
三の五	杉山 勝行
三の六	佐藤 武彦
三の七	奥村 守
三の八	中鉢 明宏
三の九	高橋 幸司
三の十	山本 真
三の十一	橋本 慎二
三の十二	増田 勇
三の十三	足立 和彦
三A	荻野あゆみ
三B	杉村 文子
三C	鍵谷 千折
三D	足立 桂子
三E	秋山 直見
三F	畔柳 睦子
三G	菊池 恵子
三H	肥田 有子
三J	村松 玲子
三K	安倉ひでの
T三A	柏木 康志
T三B	唐國 秀樹
T三C	朝比奈清孝
T三D	青山 源求

以上の人達がクラス幹事として、これからいろいろな仕事をしてくるようになります。これらの幹事を中心にして、充分にクラスの和を築いて下さい。

支部だより

田方支部

「支部会報」をつくる

支部長 野田昭二郎

四月九日に、長岡の「うなしん」に於て幹事会をひらき、四月二十六日の同窓会総会のための、田方支部としての準備をしました。そして、八月十九日に二回目の幹事会を修善寺の「コスモス」でひらき、九月十九日に浄蓮の滝にある「嵯峨野」(植田正年氏経営)で田方支部総会をひらくこと

を決め、同時に、「支部会報」をつくることも決定し、すぐにその作業にとりかかり、総会に間に合うようにしたのでした。

以上が活動内容ですが、田方は広い地区を有するため、湯ヶ島・中伊豆・修善寺・大仁・長岡・葦山・函南に、それぞれ代表者をおいて活動しています。

熱海支部

支部長 谷口 俊二

まずは、恒例になっております、新会員を迎えての総会を、四

月二日に、「ウオミサキ中央ホテル」に於ておこないました。今回は特に、母校より北岡校長先生にも参加していただき、例年のようになごやかな会をすすめることができました。毎年毎年、新入社員の前がましい顔を見ることのできますことは、実に嬉しいものがあります。また今年もひらきますので、熱海支部に入会する皆さん、どうぞご期待ください。

エール一筋に

第十五期生

水野 清

今年も又、冬富士の厳しい姿が



仰かれ「希望の像」の精神の元で住ごした学園生活が思い出される季節となりました。

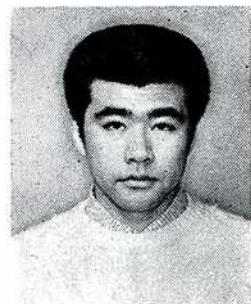
我日本大学三島高校を卒業し、十五期の期別幹事として早七年が過ぎ、同窓会活動を中心に諸先輩や後輩諸君と「ふれあい」の場を持つ事ができ大変嬉しく思います。期別幹事としての一年目は、幹事会・総会・支部会などに、同窓会の一会員として出席したというだけのものでした。しかし活動を通じこの諸分野で活躍されている諸先輩方が同窓会本来の目的である「会員の輪作り」の為に積極的に取りくんでいる姿は、三無主義の象徴のような大学生だった私にとって大変感動的なものでありました。又、私自身初めての活動であった総会において「日大節」を披露した際、同窓生の和で結ばれた先輩、後輩が一つとなり声高らかに歌った姿は、まさに日大健児なり!!と力強く感じそれと伴に諸先輩方が作り上げてきた同窓会というものを知る事ができました。それ以来この第一筋で頑張っています。「日大節を耳にすることあつたらぜひ一度声をかけてみてください。そこからまた一つ輪が広がります。」……

母校とは良いものです。

語学の重要性

第二十一期生

横山 雅人



私は、国際関係学部的一年です。この学部は、これからの国際化時代にそなえての、国際人を養成するために開設された新しい学部です。語学を中心に政治・経済方面の関係学科と文学・歴史方面の文化学科に分かれています。

私が、この学部に入って痛感したことは、語学の重要性です。英語はもちろんですが、私の言いたいの、それに続く第二外国語です。英語は共通語であり、これからの社会では話せて当然となるでしょう。ですから英語を生かすなら、誰にも負けない実力が必要となるのです。そこで第二外国語ですが、私の考えるところ、スペイン語・中国語が有望だと思っています。これを四年間で話せるまでマスターすることができたなら、他の一般科目(経済・文学等)の知識と合わせて、国際人としての将来は明るいものとなるでしょう。大学へ入ったら誘惑に負けずにこつこつと努力して下さい。

各支部長一覽

支部名	氏名	住 所	T E L
三 島	久保田 光	駿東郡清水町柿田九	(0559)七二二一九二二
田 方	野田 昭二郎	田方郡修善寺町柏久保六三三―四	(0558)七二二〇二七七
沼 津	高木 弘之	沼津市千本緑町三四―七	(0550)二二二二八四
御殿場	武藤 康徳	御殿場市新橋一九七六	(0550)二二二二八四
裾 野	勝又 国佳	裾野市深良一五五一	(0559)七二二二八九二
富 士	西村 雅幸	富士市松岡一三〇四―一七	(0555)六一一五一七五
富士宮	秋山 一雅	富士宮市浅間町四―一五	(0554)二六―三八四八
清 水	久保田 容弘	庵原郡富士川町岩淵七八―一三	(0555)八一〇八八八
静 岡	松下 悟	島田市横井四―一―二三	(0543)四五―八三一五
熱 海	谷口 俊二	熱海市上多賀九二〇―一	(0557)六八―四〇二二
小田原	川口 功一	小田原市東町四―一〇―一	(0465)三四―〇四六四

昭和五十六年度

事業報告

- 一、総会
 - 四月二十六日 於「三島プラザホテル」
 - 一、会長挨拶
 - 一、来賓挨拶
 - 一、議事
 - (1) 昭和五十五年度事業報告
 - (2) 昭和五十五年度決算報告
 - (3) 昭和五十六年度事業計画
 - (4) 昭和五十六年度予算
 - (5) 規約改正
 - 一、懇親会
- 二、幹事会
 - 一、二月十四日 於「櫻」
 - 。玉津先生御逝去の件
 - 。会報の件
 - 。新入会員入会式の件
 - 二、四月三日 於「櫻」
 - 。総会の件
 - 三、四月二十一日 於「櫻」
 - 。総会の件
 - 。納涼船の件
 - 。工業科廃止に併う件
 - 四、十一月十七日 於「じゅん」
 - 。工業科記念碑の件
 - 。忘年会の件
 - 。会報の件
 - 五、一月二十三日 於「じゅん」
 - 。会報の件
 - 。同窓会入会式の件
 - 。工業科記念碑の件
- 三、事業
 - 一、二月三日 於母校八号館

- 。同総会入会式
- 。記念講演会
- 。「スポーツを通じて得たもの」
- 。日本大学教授 遠藤幸雄氏
- 二、三月二日
 - 。同窓会報(第十号)発行
- 三、七月十九日
 - 。納涼船 沼津港より
- 四、支部
 - 一、熱海支部
 - 四月二日 於「ウオミサキ中央ホテル」
 - 二、三島支部
 - 七月十九日 於「納涼船内」
 - 三、田方支部
 - 九月十九日 於和風れすとらん「嵯峨野」
 - 五、その他
 - 一、工業科説明会
 - 五月九日 於母校
 - 工業科廃止に併う処理委員会と同窓会の打合せ
 - 二、工業(電気)同窓会
 - 十月四日 於母校八号館
 - 三、工業(土木)同窓会
 - 十一月三日 於母校八号館
 - 四、忘年会
 - 十二月十一日 於三島「水無瀬」
 - 五、工業(機械)同窓会
 - 二月七日 於母校八号館
 - 六、事務局会 三回
 - 七、その他各クラス、各クラブ
- 同窓会

昭和五十六年度

総会

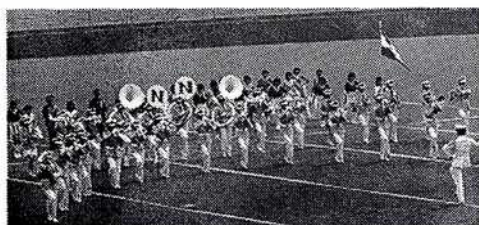
五十六年度の総会は、四月二十六日、「三島プラザホテル」において盛大に開催されました。先の幹事会において、外に出て雰囲気を変える方針になって二回目の総会であり、昨年を上回る出席者がありました。当日は賑やかな会となり、会場では久方ぶりの再会を喜びあい、あちこちで酒を酌み交わしたり、昔話に熱中したり、また、この総会を機会に会社内の先輩と後輩が一同に顔を合わせた、中には企業間で仕事の話しがはずんだりというコマもありました。これは、何といっても同窓会ならではの光景ではないでしょうか。一口に同窓生といっても、先輩と後輩、同級生、さらに地域的つながりへと広がっていくものであり、今後とも会員諸君の積極的参加と協力をお願い致します。



会長挨拶

母校部活状況

- 本年度も母校各部活の活躍が大変立派で各大会、発表会等で上位に入り、日常の成果が広く、多方面に認められております。その中で代表的な部とその内容をお知らせします。
- 美術部** 第十二回全国高等学校デザイン・写真コンクール
デザイン部門三席 入賞
古川 祥広
 - 第十五回全国高校生ボスター・絵画・写真コンクール
学校特別賞
放送部 第二十八回NHK杯全国放送コンテスト・静岡県大会朗読部門第一位
山地 葉子
 - 第二十八回NHK杯全国放送コンテスト全国大会
「自動音量調整装置による校内放送の充実」入選
第一回高校生によるビートルズ放送作品制作コンクール全国優秀賞受賞
 - バスケットボール部**
第三十六回国体東海大会
静岡県チーム第一位のメソバ
 - 水泳部** IH東海大会二百Mメドレー第三位(2分22秒75)
杉山 勝行
IH東海大会八百Mリレー第三位(8分39秒58)
IH県大会個人総合第一位
 - 体操部** 両村 泉
国体東海大会静岡県チーム第二位のメソバ
亀井 勝志
 - スケート部** IH県大会一万M第一位(19分56秒0)
久保田英生
IH県大会団体総合優勝(12連勝)



高校野球静岡県大会開会式におけるプラスバンドのドリル

〈〈工業科特集〉〉

活躍するエンジニアと思い出

中国への

プラント建設

土木科十一期生

谷口和範

中国へ、プラント建設の技術指導六ヶ月間の任務を終え、帰国三ヶ月たったがまだ数多くの余韻が残っている。現在の職を自分で選び本当によかったと自負している。仕事で海外へいきたいとは思っていたが、実現するとは夢のようだった。

入社当時は何も分からず、覚えるまで辛い毎日、もうこの仕事は自分には適していない、やめてしまおう、と思った。しかし、ここで辛さから逃げれば何をやって同じようにまた逃げてしまうだろう。もう少し、もう少し、辛けれど頑張ってみよう。自分で選んだ道なのだから、負けたとはけっして言うまい。その虚勢を重ねて人生を駆け抜けてみよう。と我慢つづけたかいがあった。中国では、マオタイ酒と中華料理の熱烈歓迎。そして、どこへ行っても友好、親善の行事が多かったように思う。仕事はもちろんのことだけれど、一生忘れられない友情があります。それは、私が高熱で入院した時です。廻りは中国人ばかり。言葉は通じないし、し

てもらいたいことも言えない。心

ぼそくて死にそうになった時、一緒に働いてくれた十九才の見習い通訳の学生が、私が入院したと聞いてすぐに見舞いに来てくれた。それだけならばありふれた普通の気持ですが、彼は朝、昼、夜と一日中私に付き添ってくれ、食事の時は口に、トイレに行く時点滴のビンを持って外で待機している。

一週間、夜は一つしかない一人用の椅子で私と一緒に寝おきし、彼の方が疲労して病気になるのではないかと心配するほどだった。「私が回復したのも、貴方の看病のおかげだよ。ありがとう。」と言うと、彼は言うのです。「私が先生の世話、看病するのは当然です。苦にはしていません。先生の仕事が終わるまで私は先生と一緒に行動し、先生を守る義務があります。先生の身に何かあれば私の

責任ですから。」

日本にいて、これだけの看病と心使いを受けることがあるだろうか。まして外国人のあかの他人の私に、こんなに心達して尽してくれるとは。涙が頬を流れて嬉しさで一杯でした。

仕事では悩みました。話で聞いていたほど作業員が働く意欲がなく、一日現場に出ていれば作業するしないは関係なく、給料は国家から出るし、これをやをりなさいとか、強制する事は国が禁止しているのだから我々はいっ作業してくれらるうとか、工事がいつになれば完成するだろうとか、考え苦しみ悩んだことはそのように脳裏から消え、私と一緒にいつも行動してくれ世話してくれた彼との出会いが私が初めて海外での仕事でうけた最高の収穫であり喜びでした。



大連にて

工業科廃止に思う

電機科一期生

野口雅稔

私達工業科が生れた年昭和三十三年は、戦後十五年を経て、時の池田内閣による所得倍増政策等により、工業中堅技術者の大量養成が期待されている時代でありました。そして我々は工業科第一期生としてスタートしたのです。我々電気科は二十八名でクラスとしては少ない人数でしたが、それだけ団結がかたく、建学の精神と云うと大げさですが、そう云った空気は言葉には表われないものの、先生方はもちろんのこと、生徒の中にもあふれていました。とは言っても、出来たばかりの工業科でありますので、実験設備は今から思えば満足のゆくものではなく、比較的簡単な弱電気関係の実験が多かったように思います。大学祭には、何か良い展示をしたいと考え、電気クラブ員が中心となって、発電所で生れた電気がどんな経路で家庭に届くかを展示しようと、先ず東京電力三島営業所に行き、トランスの柱上配線そのまゝを展示できるように交渉して、当日東京電力の人に組立ててもらったり、家庭内の電気として、蛍光灯はいかにして明るくなるのか、等の資料を東京電気大仁工場に出向いて行

記念碑を残す

本校工業科の廃止にあたり、かねてからの約束であった工業科記念碑が、同窓生の総意と寄贈をもって、無事完成することができました。ここに簡単にその経過を振り返ってみます。

- (一) 昭和五十四年七月三十一日、学校と同窓会との間で記念碑設立が決定され、具体案を作成する。
 - (二) 昭和五十六年十一月二十七日工業四科代表、同窓会役員、先生方との話し合いの結果、建立のための費用は同窓生による寄贈とすること、また、建立場所、なども同時に決定。
 - (三) 昭和五十六年十二月十日、寄贈案内を発送し同時に受付開始。
 - (四) 昭和五十七年一月工事着工、二月に完成。
 - (五) 昭和五十六年二月二十日除幕式。
- なお、母校の先生方にもご協力いただきましたことを、深くお礼申し上げます。



碑文

き、ぶっつけ本番で交渉したり、発電所の箱庭を作るために、一丁田にある製紙会社にバケツをかついで行き、チリ紙の原料をもらって来て山や谷を作って、電気の送電線の模型配線を作ったりしたものでした。またその当時はステレオがまだ一般にあまり普及していない時代でしたので、ステレオの原理の解説や、ステレオコンサートも開いて好評だったのをおぼえております。このように物を作ると云う一つの共通の目的をもった技術者としての、誇りと喜びを生徒達が感じ、互いに協力して学ぶことが出来たことを幸せに思います。

今回の工業科廃止に対する我々の存続の願いは、単なる古いものへの郷愁だけではありません。高校生の多感な青春時代を、受験戦争と云われている生存競争によって（こんなことばかりではないと思いますが）、失なわれるのが大きいような気がしてならないのです。物にしても、

文化または精神的なものにしても、それを皆が集って作りあげて行く中に、喜びを感じあえる時代であってほしいと思い、存続運動をしたのです。現在は高学歴社会であります、この精神を失うことなく、若い貴重な青春時代を送ってほしいと思います。

（東陽社専務取締役）

「若き

エンジニア」の歌

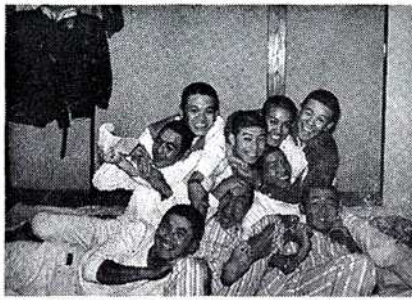
機械科五期

和田 茂

我々工業科の卒業生は、校歌、応援歌そして日大節の他に「若きエンジニアの歌」をよく歌ったものでした。一年に入學してまもなく行なわれた、バスでの遠足の時、私と同じくらいで、あまり歌の上手でなかった担任の先生が、「君達はこれから三年間、エンジニアの玉子になるべく勉強をするのだから、若きエンジニアの歌を教えてあげよう。」と言って歌われた歌でした。

一昭換の日出する国こそわが祖国
其の名をば担いて聲ゆわが母校
伸び行く日本の 力は茲に
地を拓き行く者若きエンジニア

二青春に夢あり宇宙に真理あり
現実と理想を結ぶもの我等
科学の力と不屈の意志を
武器として進まん若きエンジニア



修学旅行にて

その後も、修学旅行や遠足と、機会あるごとに歌い、我々が理想と現実を結ぶ掛け橋になるんだ。我々の手で第二の産業革命を起こすんだ、と希望に胸をふくらませたものでした。工業科の初期の生徒達は、エンジニアの玉子という自覚をもっていたので、昭和五十年代の生徒達と違って、衿の下のTバッチにも、それなりの誇りを持っていました。T定規や、ケント紙を入れる紙筒を持つ手も、何となく誇らし気でした。一年時の放課後は、毎日のように計算尺の練習をやらされました。そして全員が卒業までに三級を取るようになり、との目標でそれぞれ努力しました。しかし、その計算尺も今でもは計算器に替ってしまい、引き出しの奥で忘れられようとしていきます。でも、引き出しを開け、そこに計算尺を見るたびに、高校時代を思い出し、力学、設計、原動機といった教科を思い出し、ああ、おれたちには若きエンジニアを目指した青春があったんだ、と思い出すことだろう。そして、たとえ工業科がなくなっても、我々の心に



大学祭仮装行列

はいつまでも工業科があり、そして、この「若きエンジニアの歌」が残ることでしょう。

栄光の建築研究部

普通科七期生

江川 洋

「栄光の……」なんて言うと、実にオーバーなことと思われるかもしれない。しかし、こんな風に言わざるを得ないほどに無念の思いがある。僕の高校生活は、何となく建築研究部とともにあった。その三年間、石川先生と渥美先生を中心に、実習室の青柳さん、そして多くの先輩と友人達の中に我が青春があった。大学祭に向かって一生懸命に石膏の板をつくり、真白な家の模型を苦労してつくったこと。図面の書き方を何とか勉強して、黒い紙に白い線を引いたこと。友人が得てきた透視画法を教えてもらい、夢のマイホームを描いて展示したこと。そしてまた、病にたおれた先輩を見舞ったこと。それらの思い出がまさしく走馬燈のように、僕の脳裏を駆けめぐってゆく。これは決して単なる感傷ではなく、昭和三十九年四月から三年間におよぶ、我が青春の歴史の一部なのだ。

昭和五十六年度

記念講演

京都 大仙院

尾関宗園師

今年は、京都大仙院より、尾関宗園師をお招きして、卒業する若人のためにその活力あるお話を伺うことができました。師は、昭和七年奈良に生まれ、三十年三月、奈良教育大学を卒業し、同四月、相閣寺僧堂に掛塔、ここで雲水修業が七年間しました。そうして、昭和四十年六月に、三十三歳という若さで、大仙院住職に任命されたのです。師の説法は、若い人にも大変に人気があり、『平常心』、『スキリ禅』などの著書も多く、広く愛読されています。師のお話によって果立ちゆく若人の胸に必ずや人生の勇気づけが得られたものと思います。



尾関宗園師

同窓会規約

第一章 総則

- 第一条 本会は日本大学三島高等学校同窓会と称する。
- 第二条 本会の事務所は、これを日本大学三島高等学校内に置く。
- 第三条 本会会員は、日本大学三島高等学校の卒業生をもって正会員とし、現教職員および元教職員をもって特別会員とする。
- 第四条 本会は、母校建学の精神にのっとり会員相互の親睦と融和を図り、母校の発展興隆に寄与することを目的とする。
- 第五条 本会は、前条目的達成のために左の事業を行なう。

- 一、会員相互の親睦と融和をはかるための各種行事
- 二、母校の発展興隆に関する各種行事への協力・参加
- 三、その他、目的達成のために必要な諸行事

第二章 機関

- 第六条 本会は、事業遂行のため左記の機関を置く。
- 一、総会
- 二、幹事会
- 三、支部会
- 四、事務局
- 五、編集委員会

第一節 総会

- 第七条 総会は本会運営の最高決議機関である。総会の議事は出席会員の過半数をもってこれを決する。
- 第八条 但し、必要により各支部を代表する支部長をもって、総会の決議にかえることができる。
- 第九条 総会は本会運営についての立案実行の一切の事務を幹事会に委嘱する。
- 第十条 総会は四月一日より翌年三月三十一日までの年度一回、会長がこれを召集し、幹事会、会計監査の所管事項の報告をうける。但し、緊急を要する事項に限り、会長が認めた時、又は会員多数の要求があった場合、会長は臨時に召集しななければならない。

第二節 幹事会

- 第十条 幹事会の運営機関として左記の事項を立案し総会の承認を経たのちこれを実行する。
- 一、予算・決算に関する事。
- 二、事業計画に関する事。
- 三、会則の改廃に関する事。
- 四、その他、第五条によって必要と認めた事項。
- 第十一条 幹事会の召集は幹事長が行ない、年三回以上、原則として過半数の幹事出席のもとに開催する。また、幹事長は幹事の三分の一以上の要求があった場合は、臨時に幹事会を召集しななければならない。
- 第十二条 幹事会には幹事長一名、副幹事長二名、庶務・会計二名、その他、必要とする役職を置き幹事会の互選により選出する。
- 第十三条 幹事会に常任幹事会を設ける。常任幹事会は幹事会の役職員

- 第十四条 ならびに常任幹事によって構成され、必要により幹事会にかなることが出来る。
- 第十五条 幹事会には本会運営上、必要と認めた場合に臨時に特別の機関を設けることができる。

第三節 支部会

- 第十五条 本会は各地区に支部会を設け、本会の目的達成の推進を図る。
- 第十六条 支部の運営については、本規約に準じ細則は各支部によるものとする。

第四節 事務局

- 第十七条 事務局は幹事会のもとで本会運営を円滑ならしめるよう務める。
- 第十八条 事務局は幹事会より委嘱された者をもって構成する。

第五節 編集委員会

- 第十九条 編集委員会は幹事会に所屬し、原則として年一回の会報発行、その他、本会運営上、必要な広報の任にあたる。
- 第二十条 編集委員会は幹事会より委嘱された者をもって構成する。

第三章 役員

- 第二十一条 本会は左記の役員を置く。
- 一、会長一名、副会長二名、幹事長一名、副幹事長二名、幹事、常任幹事、会計監査二名
- 第二十二条 会長、副会長は、幹事会の推選により、総会の決議をもって選出する。会長は本会を統理し、副会長はこれを補佐する。
- 第二十三条 幹事長は幹事会を代表し、本会運営の責任を負う。
- 第二十四条 副幹事長は幹事会を補佐する。
- 第二十五条 幹事は各卒業学年の代表者が当り、学年の意見を代弁し併せて会務を分担する。
- 第二十六条 常任幹事は各地区支部会の代表者が当たり地区の意見を代弁し併せて会務を分担する。
- 第二十七条 会計監査は総会において選出され、経理を監査し、総会にその旨を報告し承認をうける。
- 第二十八条 各役員は総会の承認を経て、その任につき職務にあたる。任期は二年とする。但し、重任はさまたげない。

第四章 会計

- 第二十九条 本会の経費は会費ならびに寄附をもってこれに当てる。
- 第三十条 正会員は卒業時に終身会費を日本大学三島高等学校会計課に納入する。
- 第三十一条 本会の会計年度は四月一日より翌年三月三十一日までとする。

第五章 表彰・その他

- 第三十二条 本会に貢献したものは会長が幹事会の議により、総会の承認を得、これを表彰することができる。
- 第三十三条 会員として名誉を毀損する行為があったときは、会長が幹事会の議により総会の承認をえ、これを除名することができる。
- 第三十四条 顧問は会長がこれを委嘱し、本会運営上の諮問に応える。

第六章 附則

- 第三十五条 規約の改廃については幹事会の議により、総会の承認を経て行なう。
- 第三十六条 昭和三十六年三月十一日 改正施行
- 昭和三十七年四月一日 改正施行
- 昭和三十八年四月三十日 改正施行
- 昭和五十六年四月一日 改正施行

表彰規定

前文 本規定は日本大学三島高等学校同窓会規約第五章三十二条に基き、その適用細則を定めたものである。

- 第一条 本会々員にして、社会的に顕著な業績をあげた者に對し、所定の手続きを経て表彰することが出来る。

第二条 日本大学三島高等学校に在籍する者で、将来、国家社会に貢献し、母校及び本会の発展に寄与できる有為な人物及び団体に対し、奨学金又は奨励金を支給することができる。

- (一) 奨学金の支給をうける者は、最終学年に在籍し、在籍期間中、学業成績・人物・自治活動・健康に優れ有為な人物として学校長より推薦された者とする。ただし奨学金は一名を原則とする。
- (二) 奨学金の支給をうける団体は、生徒会所屬の団体で、顕著な業績をあげ更に一層の充実・発展が期待されるものとして、学校長より推薦された団体とする。ただし奨励金は一団体を原則とする。

第三条 第一条、第二条の表彰式は、年度末とし、総会または入会式に行う。

付 本規定は昭和五十二年二月十二日より施行する。